

Title	昭和四五年度史学科卒業論文題目；昭和四五年度大学院文学研究科修士課程卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1971
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.43, No.4 (1971. 5) ,p.138(658)- 144(664)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19710500-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

するものであった、と云う解釈を招いた。しかし碑文について検討してみると、文化的差異や誇張というだけでは説明し得ない、エジプトの優越性とプントの卑下という二つの面が看取される。

例えば「プントの首長達は陛下に安全を願う為に、肩に貢献物を背負って犬のようになっておじぎをした」という碑文がある。犬のようになって従属したという言葉は、エジプトの支配下に置かれたテヘヌの国が、トトメス三世の遠征で征服された時に使われている。又、碑文中に見られる「王が与える息によって生きることができるよう」ということは、エジプトに従属した国にのみ使われていることばである。

更に、エジプトがプントの地に運んだ群像について問題にしないで好まぬはならない。これは、花崗岩によるアモン及びハトシエプストの像である。碑文によると、この像は航海の守護神でもあったが、プントに永久に建てられることを目的として運ばれた。第一回目の遠征の時既に、エジプトの主権者たる彼女の像が永久設置を目的として運ばれていることの裏には彼女の領土権の主張があると推測される。更に脱文の為にはっきりしない点もあるが、「毎年の貢献物」又、大量の高価な物資と日常品との交換などの点を考え合わせると、この「プント遠征」には、貿易の確立という解釈では説明し得ない要素がでてくる。むしろ、プントが何らかの形で、エジプトの支配下に入ったとすべきであろう。

従って「プント遠征」には、戦闘の記録がないので、その限りでは平和的と言えるが、他方、エジプト新帝国の勢力拡大の要素

が見られ、それはハトシエプストが十八王朝の帝国主義的傾向に必ずしも逆行していない事を示している。(本塾大学院文学研究科修士課程在学)

昭和四五年度史学科卒業論文題目

国史学専攻

- 阿部 祥人 ナイフ形石器製作とポイントの製作開始について
- 北野 雅世 飛鳥寺発掘結果に関する二、三の考察
- 田村 佳宥 飛鳥寺にみる朝鮮古代文化との交流に関する一考察
- 鍋島由紀子 聖徳太子に関する一考察
- 町田 則子 厩戸皇子と蘇我馬子との関係に関する一考察
- 白鳥 恒子 蘇我氏に関する一考察
- 秦 恵子 秦氏についての一考察
- 遠藤百合子 大化前代の毛野国
- 白石 統一 古代の瀬戸内海航路に関する一考察
——六世紀頃の難波—筑紫間航路——
- 石井由美子 薬師寺の沿革についての研究
- 高倉美知子 薬師寺に残る薬師三尊像に関する研究
- 石井 敬子 金光明最三経についての二、三の考察
——特にその受容と道慈の思想について——
- 森 美知子 検非違使の発展からみた律令体制の崩壊に関する一考察
- 小野 敏子 光明皇后と藤原仲麻呂

——紫微中台を中心として——

宇野 貴和 八世紀後半における関東平野の開発についての一視点

吉田とも子 「往生要集」成立前後の浄土思想

深田 博明 親鸞の臨終来迎観とその周辺

春日いづみ 親鸞と東国

——悪人正機を中心として——

小田切初美 「喫茶養生記」前巻に関する一考察

長 節子 雪舟等揚

——その生涯と作品——

跡地 貴子 一条兼良

河原 摂子 池坊立成の成立と展開

小山 幸子 利休のわび茶について

飯沼 恵子 南坊録の真偽の問題について

矢橋 敬子 茶碗、茶入を通してみた遠州の綺麗さび

高島 明子 桂離宮を造った人々

若林 茂樹 日本人の死生観と「喪」の意義

清水真美子 平将門の乱について

山本 貞志 筑前国怡土庄について

渡部まり子 鎌倉幕府の政治機構について

——特に成初期の諸問題——

寺田みつ江 治承炎上後の興福寺再建について

西村 京子 出家からみた初期封建主従関係の性格

小野塚栄子 承久の乱に関する一考察

——院方武士を中心として——

柴田 和子 琵琶法師の発生とその展開

中岡 桂子 世阿弥の生涯と思想について

裏井 伸一 東山文化成立の一側面

——足利義政と東山文化の関係を中心として——

平山由利子 結城政勝とその領国経営について

牧原伸一郎 会津嶺の国

——その歴史と伝承について——

藤田 健二 「醒睡笑」と民話の比較

川島 ゆみ キリシタンの学校教育からみた日本人のキリスト教

受容

岡本 園子 天正十五年の伴天連追放令に関する一考察

野崎 義昭 不干斎ハピアンの二度の転宗

——そのキリスト教理解を中心に——

木下 葉子 慶長十九年の迫害の原因

——家康の外交政策——

村越寿美子 江戸幕府初期における大名統制

——秀忠期の改易に関する一考察——

藤波 隆代 踏絵する人の心

川村 幸子 史料による田沼時代再現の試み

一色 孝子 阿波藩における干鯛問屋の設置について

関野 礼子 「ええじゃないか」について

古瀬 雄二 明治六年十月政変に関する一考察
荒井やよひ 八王子千人同心

——武田小人頭から八王子千人頭・同心へ——
宇都宮哲章 日向における門制度の一考察

長谷川登喜 徳川幕府の米価調節からみた酒造統制
——主に天明寛政年間について——

山県 寛子 「石田梅巖」その思想背景について
安西 恵子 安藤昌益の思想

舛田 博子 長州藩の天保改革
——二・三の改革内容の分析と改革に対する諸見解の検討を中心として——

和田 民子 「賤称廃止令考」

今泉 克明 分家事件分析に基づく白川村大家族制度の発生と崩壊

佐相 勉 幕末・明治初年の福沢諭吉のナショナリズム
佐々木 純 福島事件に於ける「権利恢復」同盟の成立と展開について I

村松千寿子 高田事件と自由民権運動

田中 洋子 明治末期の国定教科書に於ける「家族国家」観
猪股 茂子 明治社会主義運動における道德の問題について

戸田 衣子 「ええじゃないか」
——慶応三年の打ちこわしとの関連において——

平田 順子 「菅野すが」

——革命に身を投じた一明治女性像——
岡 まり子 陸運会社創設に関する研究

東洋史学専攻

前嶋信次教授指導
「解天文人大慕閣」に対する一考察 神保 長文
ナスイール・ウツ・ディーン・トゥースイーの科学の中国に 宮本 夏子
与えたる影響について 島村真理子

龜茲国考 柳川千恵子
ミーラン壁画における西域の仏教美術 田中 浩三
サンガ論 —初期サンガを中心として— 松井 啓輔

「カウティリア実利論」による密偵制度 勝見オリ子
サティを通して見たインドの国民性 淵上 敏子
アッパース朝期のインド洋貿易とシーラーフ 牛越 和子

グレコ・ローマン時代のレバノンの諸都市について 前川 啓子
オスマン・トルコ属州小史 内藤 慈子
コンスタンティノープル —中世から近世へ—

竹田竜児教授指導

「史記」に記載されている「越」に関する考察 山城 喜憲
王羲之の雑考 —阮元「南北書派論」の疑問から— 最上 操

「東京夢華録」に見える店・肆(鋪)について 長谷川誠夫
「林泉高致」の研究 加々美和子
朱子時代の白鹿洞書院 岡村衣美子

元朝初期の色目人阿合馬の暗殺について

桜内 正子

春秋戦国期における士と農の関係について

和氣 宗子

安南国漂流物語の研究

和田 正彦

インダス文明時代における商業交易活動

旗持 敬子

「タイン・テ・ヴィー十七・八世紀及び十九世紀初頭のベトナムにおける貿易」の記注

陳 有容

原始仏教成立の社会的基盤

中村 和則

ポール・ドゥーメルの施政について

横山美那子

アジャンター壁画の一面について

磯野 礼子

ファン・ボイ・チャウとベトナム独立運動

大谷登代子

西洋史学専攻

有賀 恒夫

ゲ・ティン・ソビエト運動とその背景

掘谷 絹恵

神山四郎教授指導

古屋 輝夫

和田博徳教授指導

石井さち子

ミケーネ社会の特質

浅井 久子

明代永楽期における河運

遊 仁正

ロベスピエールとジャコバンクラブについて

藤田 弘夫

林爽文の乱に関する若干の考察

左右田重夫

トマス・モアのユートピア

深見 公子

清朝のカザフとの絹馬交易と牧廠からみた新疆の統治政策

深田 沢二

ピレンヌ・テーゼに対する一批判

秦 文世

湖南省新寧県における道光年間の一連の農民運動の研究

代田 正芳

——カロリンガ王朝期の経済環境——

平野 明子

魯迅とその時代

倉島 令子

モリスコスの追放とその結果

久野由美子

華北農村の慣習に見えたる鍵の権と主婦の地位

山辺 昭夫

国民公会時代のロベスピエールの政治理念

堀 美恵子

中国共産党と陳独秀

羽田 信

ディオニュシア発展史

市橋 時子

伊藤清司教授指導

遠藤 真弓

第一次ポエニ戦争

井上 エマ

西伯利亚入墨攷

村上 順子

ピラミッド

石田 恵子

黄帝伝説の起源

——一八七九年における政策転換——

アテナイにおけるメトイコイの性格

石井 澄代

中国古代の巫

——「時」について——

古代イタリアの大土地所有経営

——特に東周時代を中心として——

——凌純声の論文に関する二、三の問題——

——

——

——

——

ロマン・クルトア

賀島 祥子

第二次世界大戦前のイギリスの対独宥和政策について

一八四八年の中欧のナシヨナリズム

加藤 久江

森 久美子

——Posnania 分割における一考察——

古代ローマ経済の一側面

三浦 康夫

アヴィニヨン教皇庁設立におけるクレメント五世

金子 敦美

——帝政末期のコロヌス制——

ルター神学と教会組織

河村 博子

アイルランド土地問題

松本 敏子

南北戦争前の南部におけるセクションナリズムの経済的実態

木村 素子

ミラノ勅令とコンスタンチヌス

小山 牧子

印紙条例一揆とサンズ・オブ・リバティ

木下 良子

一三世紀イングランドのマナー制について

中川 晴子

ローマ帝政期ロンドンにおける都市の成立過程

亀徳 和子

百年戦争期に於けるフランス国民意識の昂揚について

中込 真弓

トウキュディデス「戦史」の敘述の変化について

菊池 正文

第一次大戦に於けるアメリカ

永原規久子

メリーランド植民地における宗教的寛容について

藤井 民子

——親英的中心から参戦へ——

森岡敬一郎教授指導

古代イスラエル王国の統一とその王権の性格について

中村 豊

一五六三年の Elizabethan Settlement の成立過程

小西 淑子

ギリシャ敘事詩とその伝承過程

西岡 洋子

「第二次英蘭戦争」の原因についての再考察

小坂けさみ

——特にホメロスについて——

アメリカ革命 ——その連続性と対立——

黒崎 順子

イスラム教徒支配下のスペインの衰退の原因について

野口 陽子

工場制度確立期に於ける賃金労働者

北野 賢司

フランス第二帝政時代の精神史の一側面

西尾 晴子

エリザベス朝の資本主義

松屋 輝美

エイブラハム・リンカーンの「奴隷解放布告」

小倉久充子

——ヨークシャーの織物業を中心に——

増沢 照司

——その目的と歴史的意味——

大國るり子

コリングウッドの歴史認識論

森 恵子

ペトラルカと古典復興

大國るり子

一三世紀のシャルトル学派

森 薫

ペトラルカと古典復興

大國るり子

ローマ帝国末期の都市

森 薫

ペトラルカと古典復興

大國るり子

米田治教授指導

アレクサンダー大王の統治理念に関する一考察
トルバドゥールとカタリ派との関連についての一考察

大森まゆ美

マキャベリとフロレンス社会

大脇 保子

フランクフルトの Ghetto についての一考察

酒井 都

米国南部における黒人選挙権剝奪問題

関口 育子

マヤにおける人身供犠の起源について

清水 知子

イギリス市民革命におけるレヴェラー運動

篠原 恵子

スペイン第二共和制における農業政策

白子真知子

シュトレゼマンとワイマール共和国の崩壊

須永 洋子

メソポタミアの新年祭における信仰について

杉山寿和子

ユスティニアヌス大帝の宗教政策

鈴木千栄子

アリストファネスを通して見たアテナイ社会

鈴木 博子

一七世紀の経済危機とフランスの絶対王制

田中久美子

一八六〇年のロシア農村共同体とナロードニキ運動

田中 勝

魔女裁判 —— ジャンヌ・ダルクの場合 ——

高木百合子

New Diplomacy の起源について

土屋 晴子

エリザベス朝における冒險商人に関する一考察

恒川 孝子

モンロー宣言とアメリカの孤立主義

内田万里子

フロンティアとアメリカ精神

上田 美穂

一九二〇年代のアメリカ社会と文学

若村 緑

八嶋 郁子

—— F. S. Fitzgerald を中心に ——

仏第三共和成立に於ける Thiers の役割

山口 庸子

ルターの政治思想と領邦国家の成立

柳沢 明子

昭和四五年度大学院文学研究科修士課程

卒業論文題目

国史学専攻

藤村 東男 注口土器の研究 II

—— 大洞系注口土器の製作技術の在り方を中心として ——

舟越 香郎 中臣氏の成立と展開に関する一試論

鈴木道之助 縄文時代草創期における狩猟活動の考察

—— 愛媛県上浮穴郡美川村上黒岩岩陰遺跡を中心として ——

東洋史学専攻

佐々木 庸 「公孫竜子」試論

稲葉 信正 アッパース朝時代に於けるアラビアの

外科医療について

張 恵一 「東西洋考」にあらわれた暹羅国、特に

その歴史沿革について

西洋史学専攻

角谷 純子 ハトシエプストのプリント遠征に関する一考察

二里 木明 ネットプへ

大竹 裕 若きフィヒテの社会観と社会改革理念

宇野 博子 イギリス工場法運動と人道主義に関する一考察

執筆者紹介

森岡敬一郎 慶応義塾大学文学部教授

伊藤清司 ” ”

宮崎洋 北海道教育大学(釧路分校)専任講師

真下英信 慶応義塾大学大学院文学部
研究科博士課程・同文学部
兼任講師

村山光一 慶応義塾中等部教諭

” 大学文学部講師

松崎欣一 慶応義塾志木高等学校教諭

” 大学文学部教授

清水潤三 ” ” 助教授

高橋正彦 ” ” 教授

河北展生 ” ” 教授